

「フィリピン研修参加報告書」

京都大学文学部2年 (氏名) 山淵 あいり

フィリピン研修に参加した目的は、学習支援ボランティアで関わっている JFC (Japanese-Filipino Children) の子供たちが生まれ育った国の現状をこの目で見ることで、JFC やその母親の抱える問題についてよりよく理解することだった。

今回の研修では現地の様々な方にインタビューをする機会を設けていただいた。具体的にはエンターテイナーや看護師・介護士として、あるいは結婚移民として日本に渡る人、渡った経験のある人、日本で働くために職業訓練やオーディションを受ける人などである。結婚移民の中には、40歳も年の離れた日本人男性と結婚する私と同世代の女性や、相手の日本人男性と SNS で知り合ったという女性、相手とはまだ3回しかあったことがないという女性もいて、私の今までの結婚への概念が覆された。フィリピンパブで働く若い女性たちの中にはすでにシングルマザーの人も多く、子供に会えないのは寂しいと話してくれた人もいた。私の今までの知識では理解が追いつかないような複雑な状況にある人々に対して、過去や現状、それに対する心境について質問することは決して簡単ではなかった。どのような心持で接したらいいのか、相手に嫌悪感を抱かせてしまわないかなどと悩んで気が重くなることもしばしばあったが、大事なことは純粋に相手を理解しようという姿勢であることを学んだ。

私たちはまた、介護士家事労働者の職業訓練施設や、エンターテイナーオーディションやダンスレッスンの現場を見学をした。フィリピンが多くの労働力を養成し輸出する国であり、海外への出稼ぎが雇用の機会としての選択肢の一つとしてあること、若い女性も家計を支えることを当たり前のように期待されていることを感じ、日本とは根本的に異なるフィリピンの社会構造を目の当たりにした気がした。彼女たちも自分で選んだ方法で家族を支えるために必死であることを理解できたことで、私が自分の価値観だけで考えていて、彼女たちに対して誤った認識を持っていたことを痛感させられた。

フィリピンが労働力輸出大国であるのは、国内の雇用状況に問題が多いからだ。雇用機会も少なく、賃金も非常に少ない。山積する問題は街を歩いている中でも多く目に飛び込んできた。タクシーやジブニーを呼び止めてくることで観光客から少額のチップを集めるホームレスたちや、物を売り歩く幼い子供たち。立ち並ぶ高層ビルとその脇にあるバラック集落やスラム街。信号待ちで停車していると車の窓の外からお金を求めて手を差し出してくる子供の姿には、何度も胸を締め付けられるような思いになった。

日本に移住するフィリピン人の話から共通して受けた印象は、彼らが移住後の仕事や子供の教育などについてほとんど考えていないということだ。この楽観的な国民性がフィリピンの社会構造のあらゆる問題解決を遅らせているのではないかと感じざるを得なかった。ただ、受け入れる側の日本にも問題は多くあることも事実である。少子高齢化を背景として労働力の不足が喫緊の問題としてあるが、海外からの労働力を受け入れる制度はまだ十分とは言えないし、外国人労働者に対して偏見をもって差別をする人もいるだろう。彼らのために日本人としてできることは何かを考えさせられた。

人との接し方という点では、引率してくださった安里先生から学ぶことが非常に多かった。例えば、日本への結婚移民や出稼ぎ労働者には、日本に渡った後に起こりうる厳しい状況についても包み隠さず知らせつつ、彼らが自分の身を守るために役立つ具体的な情報を提供し、さらに彼女たちは日本にとって重要な労働力であり日比両方が利益のある対等な関係であるべきだということ、彼女たちにも日本人と同等の労働条件を与えられる権利があること、困ったとき頼れる場所や守ってくれるものが必ずあるということなど彼らの気持ちに寄り添う言葉をかける先生の姿が印象的だった。相手の話を一方的に聞き出すだけでなく、有益な情報も提供できるようになりたいと感じ、そのためには知識が不足しすぎていることを痛感した。理解を深める努力の必要性とその重要性に気づくことができた。

研修中、現地の JFC と交流する機会もあった。父親が音信不通であったことがない子、日本にも家族を持つ父親に認知を拒否される子、来日した際に再会した父親にハグを拒絶された子。彼らのショックは計り知れないものであると思う。しかし、多くが父親に対する憧れと、日本国籍を取りたいと願う気持ちを持っていることは意外だった。今までは日本に住む JFC としか関わったことが無かったが、フィリピンに住む JFC も彼らと同様に自分の存在やアイデンティティにおける悩みを持っていることと、彼ら母子のために支援をする DAWN や日本国籍取得のために法的支援をするマリガヤハウスの存在を知ることができたことは今後の JFC に対するボランティア活動にも生かせる経験であった。

研修を終えた今、日本にいただけでは知ることができないことが世界には溢れていることを改めて実感し、視野を広げるためにも海外に出る必要性を感じている。世界中の知らないことを知り、感じたことのないことを感じたいという好奇心と、知らないがゆえに持っている不必要な偏見や誤解を払拭しなければという切迫感でいっぱいだ。今後の JFC への学習支援ボランティアにおいても、本当の意味で彼らの問題や抱える悩みをより深く理解することで、より彼らの将来のために役立つ支援や声かけができるようになりたいと感じた。これを今後の学習へつなげたいと思う。